

# Color Gallery

シリーズ

匠の化学

## 七宝（エマイユ） —色彩の秘密— 中嶋邦夫

我が国では壺や絵皿などの工芸として知られている七宝であるが、その起源は紀元前 2000 年頃のメソポタミアといわれ、ツタンカーメンの黄金のマスクの装飾にも使用されている、金属の加飾技術の一つである。七宝教室などで比較的身近に触れることのできる工芸である一方、その実態や制作技術、その最大の特徴である色彩の原理については、一般には理解されずにいる点も多い。本稿では、古代から世界中で使われてきた七宝技法の概要と、豊かな色彩が生まれる秘密を解説する。P192-193



### 有線七宝 (émail cloisonné)

金、銀、銅などの胎（土台）の上に、薄いリボン状の金属線（厚み 0.02~0.06 mm, 幅 1.0 mm 程度）で文様の輪郭を作り、そこに釉薬を載せて焼成、研ぎあげる技法。写真は著者が制作したもので、黒地に白の菊花と葉に有線七宝の技法が用いられている。

### 透胎七宝 (émail plique à jour)

胎に透かしを入れた空間に透明釉を施して焼成、研磨する技法。ステンドグラスのような効果をもたらす。日本では胎の上に有線七宝を施した後、金属の胎を酸で溶かして除去し、同様の効果を得る技法を省胎七宝と呼ぶ。写真は著者制作によるトンボの翅にステンドグラス状の透胎七宝が用いられている作品。

